

第三部

読書ノート

石積 勝

第三部は石積の読書ノートである。この読書ノートはいずれも「比較日本研究会」例会においてレジュメとして使用されたものであるが、現在継続中の研究所プロジェクト「政治学グランド・セオリーの再構築」において醸成され統合されることが期待されているものである。いくつかの読書ノートは学部学生・大学院生の参考文献として使用することが可能であるとの判断のもとあえてここに掲載することにした。簡単にそれぞれの著作の性格について触れておく。

読書ノート①『日米同盟の正体』（孫崎亨著・講談社現代新書）と②『世界が日本を認める日』（カレル・ヴァン・ウォルフレンPHP研究所）はいずれもリベラル国際政治観察の視点からの日本外交に関する論考である。

①の孫崎氏の手になる著書は2010年3月現在、書店のベストセラー棚に並んでいる。外務省・防衛大学という、いわば保守本流の組織の中に身を置いてきた孫崎氏から見てもここ十年・二十年の日本外交、特にその対米関係は劣化著しいということである。

②の著者カレル・ウォルフレン氏は『日本・権力構造の謎』（早川書房）以来、主に日本の統治システムについて鋭い論究を提示し続けてきているが、ここ数年はグローバルな世界情勢に対しての発言を増加させている。その中のひとつがここで取り上げた『世界が日本を認める日』である。現実の日本はウォルフレン氏の指摘してきた問題を次から次に露呈しているし、「世界に認められる日本」にも進んでいない。氏の指摘をもう一度真摯に受け止めざるを得ない状況だ。しかし教えられるところの多いこの二つの著書ではあるが、実はリベラル政治学の限界を明らかにしているというのが石積の見方である。

オルタナティブの国際統治理論はその先、つまりリベラル政治学のその先を見据えている。根源的にリベラル政治学を越えない限り、政策策定におい

でもブレークスルーを達成できないのではないかというのが石積の見方である。そのあたりのことも含めてレジュメの中で、あるいはレジュメの最後で石積の問題提起、あるいは覚え書きがある。

読書ノート③の『なぜアメリカはこんなに戦争をするのか』（晶文社）の著者ダグラス・ラミスは近代リベラル政治学に大きな懐疑を抱くという意味では、孫崎氏やウォルフレン氏などとは異なる。その意味で三番目にこの読書ノートを置いた。このレジュメは2003年に書かれている。このレジュメは極めて簡単なものであり、わたし自身の論考もほとんど含まれていないものであるが、しかしイラク戦争・アフガン戦争はそもそも何だったかのか、もう一度想起することはやはり重要であると判断してここに入れた。

読書ノート④⑤はいずれも問題提起の書である。そこに顕われている考え方を批判するにせよ、部分的に同意するにせよ看過できないものであるとしてここに掲載した。④の『なぜ民主主義を世界に広げるのか』（ダイヤモンド社）—— 圧制とテロに打ち勝つ「自由」の力——（ナタン・シャランスキー著）は、いわゆるネオコンの思想的根拠を強烈に提供しているものである。当代の論客、宮台真司氏も注目し、自ら日本語版に「解説」を書いている。今後の政治学ブレークスルーと世界の現実理解のためには避けられないテーマであると考え、研究会（比較日本研究会）で取り上げた。⑤の『反西洋思想』（新潮新書）I・ブルマ&A・マルガリート著もなかなか読みごたえのある書であった。9.11勃発後の欧米の報道には、その自爆テロと神風特攻隊、パールハーバーという言葉が連日踊るが、それはまた「近代の超克」という広がりのある、思想史上の問題を呼び起こした。このことに関するかなり本格的な論考がこの『反西洋思想』には展開されている。このレジュメをもとに学生に丸々一時間講義したことがあった。政治意識の非常に高い数名の学生が「最高に面白い話だった」と感想を言ってきたことを思い出す。この著に対する石積のコメントは殆ど記されていないがあえて掲載した。

読書ノート⑥は故神島二郎の最後の新聞寄稿である。1993年という今から17年前の論考であるにもかかわらず、時間差を感じさせない。指摘された問題と視点がいかにも本質的なものであるかの証左であろう。第一回からそれぞれまず神島の寄稿文を掲載し、それぞれについての石積の論考をそのまま載せた。論考は2010年の現実に照らして再びなされなければならない。いずれにせよ様々な考察に私たちを誘う神島の寄稿文である。